

75th kanto university league soccer 入替戦

NEVER

2001.11.23号

編集：関東大学サッカーリーグ戦プログラム制作委員会 印刷：関東大学サッカー連盟

11/23(祝) 入替戦

11:30 KICK OFF

立正大学 V S 早稲田大学
(2部リーグ7位) (都県リーグ2位)

13:30 KICK OFF

慶應義塾大学 V S 法政大学
(1部リーグ7位) (2部リーグ2位)

- ・立正大、慶應義塾大が勝った場合はそれぞれ現在所属するリーグに残留
- ・早大勝利の場合、立正大は2年振り東京都1部降格、早大は2年振り関東2部昇格
- ・法政大勝利の場合、慶應義塾大は5年振り2部降格、法政大は15年振り1部昇格
- ・90分を経過して勝敗が決しない場合は、30分を限度とするVゴール方式の延長戦
それでも勝敗が決しない場合はそれぞれ現在所属するリーグに残留

<関東1部リーグ>

順位	1部	国士大	筑波大	順大	駒澤大	東字大	青字大	慶應大	中央大	勝点	勝	負	分	得点	失点	得失差
7	慶應大	0●3 0△0	1●5 0●4	1●3 1○0	0●2 0△0	0●1 1○0	4○1 1●2	△	1△1 0△0	13	3	7	4	10	22	-12

<関東2部リーグ>

順位	2部	亜大	法政大	明治大	東農大	東海大	日大	立正大	日体大	勝点	勝	負	分	得点	失点	得失差
2	法政大	0●3 0△0	△	3△3 1△1	4○1 1○0	1●3 1●3	2○0 4○2	1○0 2○0	5○0 0△0	25	7	3	4	25	16	+9
7	立正大	1●3 2●3	0●1 0●2	0△0 1△1	0●2 1●3	0●2 1○0	2○1 2○1	△	1●2 2●4	11	3	9	2	13	25	-12

※上段は後期、下段は前期の対戦成績

<東京都1部リーグ>

順位	東京1部	早大	専修大	東洋大	帝京大	学習院	上智大	國學院	東京大	勝点	勝	負	分	得点	失点	得失差
1	早大	△	4○2	4○0	0●3	1○0	3○0	3○0	5○0	18	6	1	0	20	5	+15

※関東大学サッカー大会の結果は裏面参照

昨年の入替戦で早稲田大を破って15年振りに関東リーグに昇格した立正大。2期制元年の関東2部リーグで14試合を戦ったが、昇格1年目のシーズンは3勝9敗2分の7位で終わった。

前期は2勝4敗1分。開幕戦は敗れたものの2戦目で初勝利、3戦目では明治大を苦しめてドローと3節までに勝点4を稼ぐ好スタートを見せ、7試合で合計9得点と、積極的なサッカーでチャレンジした姿勢が後期に向けてまずまずの結果を出したと言える。しかし、後期は初戦で明治大と引き分けた後に4連敗。課題としていた失点数は前期をわずかに下回ったものの、逆に得点数も半減。最終節で最下位・日体大に敗れて勝点で並ばれたが、得失点差で辛くも7位をキープ、自動降格を免れた。ゴールが遠かった後期だが、スタメンに定着したFW早川がチームの4得点中3得点をマークし力をつけてきた。ダブルボランチの一角として中盤のバランスを取る“黒子役”に徹していたMF上田のポジションを12節から1列上げており、攻撃力アップのためには入替戦でもその布陣が考えられる。MFとDFは各4ポジションをそれぞれ5〜6人で賅っており、経験は積んできた。

昨年及早稲田大との入替戦は、伝統校に名前負けすることもなく、3点目はループシュートを決めるなど伸び伸びとしたサッカーを見せた。奇しくも立場を逆にした同じ顔合わせとなったが、関東リーグで14試合を経験できたことは大きなアドバンテージであることに間違いない。後期の連敗中に秋山監督が懸念していた「降格を恐れて“負けたくない”サッカーをしてしまう」という消極的な姿勢さえ見せなければ、早稲田大の気迫にも劣ることはないだろう。

立正大

最近4年間の成績

- 1998 東京都1部1位(4勝3分)
関東大会予選リーグで敗退
- 1999 東京都1部1位(4勝2敗1分)
関東大会予選リーグで敗退
- 2000 東京都1部3位(4勝2敗1分)
関東大会優勝で都県1位
→入替戦 VS 早稲田大
3-2で勝利し関東2部昇格
- 2001 関東2部7位(3勝9敗2分)
→入替戦 VS 早稲田大

	早川	長谷川		
浅野			上田	
	可児	安		
黄	大石	砂村	高野	

若林

立正大 VS

早稲田大学

昨年の入替戦で立正大に敗れ、初めて関東リーグから降格してしまった早稲田大。今年はS級ライセンスも持つ藤原義三氏を“史上初のプロ監督”として招聘し、チームの立て直しを図ってきた。

関東大学リーグが春・秋の2期制リーグをスタートさせたのを尻目に、早稲田大の関東復帰を賭けたシーズンは関東選手権の東京都予選から始まった。トーナメントを勝ち上がったが決勝で帝京大に苦杯。関東選手権は明治大を3-2で下したが、2戦目で順手に敗れた。それでも、「まず守備面から強化してきた」(藤原監督)成果は秋に証明。東京都1部リーグでは、苦手の帝京大に敗れたものの6勝1敗、無失点5試合、合計わずか5失点で優勝した。1位が自動的に関東2部昇格となる関東大会は、中央学院大と尚美学園大とともに3-0で退け順調に決勝まで駒を進めた。しかし、決勝では「緊張が出てしまった」(青嶋主将)と言うように、固さにつけ込まれ流経大に2-5と大敗。5失点は今季初のためダメージが大きかったようだが、「(入替戦まで)約2週間あるのはよかった」と藤原監督は言う。

ボランチで攻撃の起点となるMF青嶋、攻撃を組み立てる左右のMF佐藤勇・上赤坂と、昨年からの中心選手が攻撃の軸。DFは高さのあるCB・細川と斉藤が中心。流経大戦で斉藤が負傷退場したが、負傷により欠場が続いていたDF結城が戻れることが好材料だ。「精神的な立て直しが重要。戦術は、これまでやってきたことを繰り返すしかない」(藤原監督)。立正大との“因縁対決”になったことで、選手側は「変に意識しないようにやりたい」(青嶋)と言う。早稲田大にとって最大の敵は、自分たちの中にあるのかもしれない。

早稲田大学

最近4年間の成績

- 1998 2部リーグ6位(3勝3敗1分)
- 1999 2部リーグ3位(3勝1敗3分)
- 2000 2部リーグ8位(4敗3分)
→入替戦 VS 立正大
2-3で敗退し東京都1部降格
- 2001 東京都1部1位(6勝1敗)
関東大会準優勝で都県2位
→入替戦 VS 立正大

	小貫	庄堂		
佐藤勇			上赤坂	
	山田	青嶋		
佐藤利	細川	結城	秋山	

植草

得点力不足という課題を抱えながら、試合巧者ぶりを見せて前期5位につけた慶應大。しかし、後期は1分けをはさみ5連敗。最終節でようやく攻撃陣が奮起、勝点3をもぎ取って自動降格を免れた。

前期は平均失点0.85という固い守りをベースにワンチャンスを活かす戦いで2勝3分と着実に勝点を積み重ねたが、攻撃力アップのため深く引いた守備ではなく前線からのボール奪取へとワンステップ上の戦いを目指した後期は、その“積極的な守備”が綻びた格好。特にセットプレーから失点するケースが多く、一瞬の隙をつかれリズムがつかめないうまま敗戦を重ねた。しかし大石監督は、「春はチャンスそのものがなかったが、それを作ることができてきた」と敗戦の中にも手応えを感じていた。その通り、最終節ではサイドを起点にした攻撃からFW槻木が得点を重ね、おぼろげに感じていた手応えをゴールに結びつけた。また、MF山口と渡辺がダブルボランチを組んだことで中盤が安定。単調になりがちな展開の中で、両サイドにボールを散らして自分たちのリズムをつくり自信をつかんだ。

何より、1年生を含め20名以上の選手が1部リーグに出場、各々の持ち味を活かして戦えたことは来季にもつながる明るい材料だ。加えて、大敗も惜敗も、僅差をものにした試合も含め1部校と渡り合った数々の経験は入替戦において大きな強みとなるはず。1998年に1部に昇格して以来、4年連続となる入替戦。慶應が見せる、チームが一丸となった時の集中力と1部の意地には定評がある。昨年の入替戦も3点を奪取しての逆転勝利。「1部を勝ち取りに行く」(大石監督)という今年も、その伝統を発揮できれば1部死守は固い。

慶應義塾大学

最近4年間の成績

- 1998 1部リーグ7位(2勝4敗1分)
→入替戦 VS 日大
1-1で引き分け1部残留
- 1999 1部リーグ8位(2勝5敗)
→入替戦 VS 東農大
1-0で勝利し1部残留
- 2000 1部リーグ7位(2勝4敗1分)
→入替戦 VS 東海大
3-2で勝利し1部残留
- 2001 1部リーグ7位(3勝7敗4分)
→入替戦 VS 法政大

	槻木	富田	
玉田			太田
	山口	渡辺	
小口	岩間	河村	戸塚

元木

慶應義塾大学

V S

法政大学

2部リーグで2位となり、5年振りに1部との入替戦出場を決めた法政大。しかし、前期の3節から後期の最終節を迎えるまで首位を守り続けただけに、自動昇格を“逃した”印象の方が強い。

前期は開幕戦で引き分けた後3連勝、後期は開幕から4連勝。前期・後期とも順調に勝ち星を重ねながら、残り3試合で失速するという同じ展開に陥ってしまったことが大きな誤算だ。昨年残り2試合まで首位に立ちながら3位となって入替戦出場を逃しているだけに、精神面の影響もあっただろう。後期の後半3試合で9失点したのが気にかかるが、最終節で優勝への意地と執念を見せ明治大から3得点を奪ったのが昨年とは違う成長点とも言える。追い込まれてくと立て直しがきかず脆さを露呈してきただけに、“負ければ3位”という窮地で激しいシーソーゲームを落とさなかったことは、昨年の悔しさも合わせて“残り1試合”の勝負へと望みをつないだ。

DF柳沢、ダブルボランチの田上と大河、負傷から驚異的な回復を見せたFW石原と、中心になる4年生がバランス良くチームを固め、2部アシスト王となったMF長山やベストイレブンを受賞したFW中村ら下級生が豊富な運動量で相手ゴールに迫る。DF加藤・小澤らのセットプレーからの得点も多い。後半は崩れたが、もともとは安定した守備で首位を走ってきたチーム。“守る立場”の慶應大に対してボールを支配することは充分考えられるが、逆にそれは法政大にとっては「ウチの形ではない」(横谷監督)。そうなった時どうするか、つまり、攻め急がずパスの精度を高めることが12・13節の敗戦から出た課題だ。そして、攻め込んでいる時の相手の逆襲には細心の注意を払いたい。

法政大学

最近4年間の成績

- 1998 2部リーグ3位(3勝2敗2分)
- 1999 2部リーグ7位(1勝5敗1分)
→入替戦 VS 明海大
1-1で引き分け2部残留
- 2000 2部リーグ3位(3勝2敗2分)
- 2001 2部リーグ2位(7勝3敗4分)
→入替戦 VS 慶應大

	中村	林	
佐々木			長山
	大河	田上	
流田	小澤	加藤	柳沢

為田

*予想メンバーは直近の試合を参考としています

流通経済大学 3年振り 2部昇格!

◆関東で戦う準備の2年を経て～圧倒的な攻撃力で優勝決める◆

今年から優勝チームが関東2部リーグへ自動的に昇格することになった関東大学サッカー大会。3試合で15得点という圧倒的な攻撃力で優勝した流通経済大が3年振りとなる関東2部リーグ昇格を決めた。

決勝戦は、昨年まで関東大学リーグに属していた名門・早稲田大。しかし、流経大は立ち上がりから持ち味である積極的な攻撃を仕掛けて早稲田陣内に攻め込み、29分に右サイドからの栗澤のパスを池田が左足で蹴り込んで先制。5分後に同点弾を許すという若さが見えたものの、42分にまたも右サイドからのパスを箕輪が合わせて勝ち越し。後半もプレッシャーを全く感じさせない伸び伸びとした戦い振りで、エース・阿部の2得点と途中出場・杉本の得点で3点を追加。「スピードのあるプレーを要求し続けてきた」という中野監督の言葉通り、特に左右のMFとFWの突破のスピード、中盤でのパスのスピードを充分に活かし勝利を収めた。

入替戦で専修大に勝利し、関東2部で戦った1999年は2分5敗。初の挑戦は苦い経験に終わった。茨城県の大学リーグは同好会レベルのチームの参加を得てようやくリーグ戦が成り立つ状態のため、ここ2年間、流経大のトップチームは遠征や練習試合を中心にチーム力を維持・向上させてきた。今年の“公式試合”は関東選手権(2試合)と天皇杯予選(2試合)、そしてこの関東大会(3試合)のみと言ってよい。久保主将が「去年も今年もそういう状況だったので、来年は2部でリーグ戦をやりたいと思いつけていた」と言うように、公式試合への渴望感が大きなモチベーションになった。

メンバー18人のうち4年生は2人。今年のチームがほぼ、このまま来年のチームになる。少ない公式試合の中で、関東選手権で法政大、天皇杯予選では筑波大を破った。そして、早稲田大を破っての関東2部昇格。関東リーグでの挑戦を跳ね返され、茨城県から再スタートした流経大は、2年前より確実にパワーアップして2部リーグに戻ってくるようになった。

【中野雄二監督】

「2年前はまだ2部で戦う準備ができていなかった。あの時一度落ちたことで、目先の勝利だけでなく、2部でも優勝できるチームを目指してトレーニングの中で意識改革をしてきた。点を取る力はあるが、2失点したことは来年への課題。厳しい試合を多く経験してきていないのは弱点かもしれないが、来年もこのメンバーで春から戦えるのは我々のアドバンテージ。アドバンテージのあるうちに勝点を稼いでいきたい」

【久保唯史主将】

「2点は取られてしまったが、攻撃はいつも通りにうまくいった。2年前よりもチームとして自信があった。もう一度2部でチャレンジしたい」

* 昇格を決めた早稲田戦のスターティングイレブン *

阿部吉朗(3年)	箕輪圭介(2年)
	栗澤廉一(1年)
池田昌広(2年)	吉沢秀幸(3年)
吹原健太(3年)	久保唯史(3年)
川島正人(4年)	高木建太(3年)
	木下大樹(2年)
	塩田仁史(2年)

<第34回関東大学サッカー大会>

優勝 流通経済大学

